ポラリスを仰ぐ北の大地から

地域医療ビジョンの具体化の行方

室蘭市医師会　会長　稲川　　昭

思いがけない総選挙に突入し、景気回復の実感が無い、デフレマインドの克服がいまだ確固としていない、アベノミクスが失敗だ、いや道半ばだ、富裕層や大企業だけが恩恵を被っているなど総論的報道が続いております。

国は人口構成から予測可能だった団塊ジュニアの結婚出産年齢期を見据えた最も重要な少子化対策に失敗し、今後なるようにしかならない人口減社会の医療と介護需要の将来推計を見せつけ、地方創生は全国個別の処方箋が必要と丸投げされた地方都市は、街を維持する処方箋を出せるでしょうか。借金による２％成長の目標を達成しバラ色の未来を夢見るスローガン政治に何を期待すれば良いでしょうか。東京など首都圏の一極集中をさらに助長する景気重点政策には今まで議論されてきた首都機能分散などの政策が無く、ブラックフォールという例えの途轍もない吸引力と地方のさらなる衰退を感じます。

借金を次世代に残さないという声の中でも１分間に6,000万円の借金が積み上げられているとのことです。これだけ借金を積み上げた老人、現役世代はそろそろ、景気回復すれば何とかなるという神話から脱却し、超高齢化社会を見据えた社会的弱者対策に向けた議論が必要とされているのではないでしょうか。

徹底した効率化を重視し増大する社会保障費削減を意図する圧力に対抗し、国民の満足度、幸福度などを考慮した経済学を提唱した宇沢弘文先生の制度主義的な観点（平成21年度日本医師会のパンフで知りました）が考慮された政策が提言、議論され、内容が深まって欲しいものです。地域の幸福度（住み良さ）に大きく寄与する健康を支える医療のインフラとしての役割は地方ほど大きいと思いますが……。人口減、高齢化、財政難の三重苦の中で地域医療ビジョンの具体化は前途多難。

第一号介護保険者になって

江別医師会　会長　野呂　英行

私が生まれる２年前、昭和22年１月に父野呂英三が野幌駅前に野幌診療所を開設して67年。翌23年には新生江別医師会が札幌外四郡医師会として再スタートが切られるなど、常に地域と医師会とともに歩んできた。

この間、昭和30年には許可病床31床の野幌病院となり、私も58年には副院長に就任、以来31年間父の後を追いかけてきた。

思えばもの心がついた時から父と母の仕事をする姿ばかりを見ていた。今と違い日曜も夜間もなく、呼ばれれば夏はバイク、冬は時に馬そりに乗り、年中往診に出かけていく姿を当たり前のことと思って見ていた。

医師になった当初から、団塊の世代としての実感もあり、医療と介護の連携をライフワークとして意識してきた。時間はかかったがその夢は少しずつ形となり、居宅介護支援事業から、訪問看護ステーション、グループホーム、そして介護老人保健施設へとつながり、今年４月には長年の市民からの要望に応え、地域密着型介護老人福祉施設の開設を果たすことができた。

気が付けば65歳、私自身第一号介護保険者となってしまったが、現実はといえば、25年問題という大きな課題を、国も地域も私たちも胸元に突きつけられたままである。

その25年まであと10年、ライフワークとしてどこまでやりきれるのか、体力、知力の衰えを実感するこのごろではあるが、「ひと休みするのはまだまだ早い」と父に言われている気がする。